◇◇◇◇◇◇園長室の窓から(1)◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

消耗教材を考える

原口　純子

幼児が主体的に環境に関わって、物を作ったり遊んだりするという保育は、教師が中心になって、何かを作らせたり、させていた保育よりはるかに多くの物や材料を必要とします。もし、幼児の〝やりたい思い〟を納得するまで経験させよう、と思ったら、紙類やテープ類、ストローでも割り箸でも底をつくまで使ってしまうことも稀ではありません。

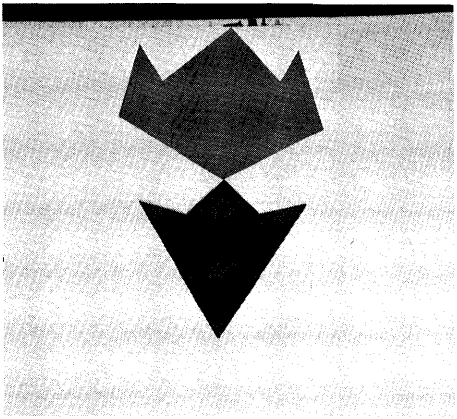
幼児は育ちつつある能力や、自分で作れるようになった物を、習熟するまで、何度でも繰り返し作り続けます。また、イメージに合うまで試行錯誤を重ね、失敗したものを捨てたり、他人にあげたりするので、たくさんの紙やテープなどの材料を消費することは容易に理解されます。

例えばスキップのできるようになった幼児が、どこに行くにもスキップをしているように、また、紙で剣を巻くことのできるようになった幼児が、何本も何本も剣を作ることからもわかります。

かつて、製作帳や貼り絵ワークなどがあった時代は折り紙を一人につき赤と緑を一枚ずつ与え、チューリップと葉っぱの折り方と貼り方を教えました。

教師の意図どおりに仕上がることに目的があったので、無駄と言うか余計にかかる紙ということはなかったのです。しかし同時に、もっと作りたい気持ちも、意欲も、作りたくない気持ちも封じ込めていたともいえましょう。

大人の目にうつる無駄と幼児の成長にとっての必要な消費とを見分けることは大変むずかしいので



▲製作帳に貼ったチューリップ

す。日々山のように出るゴミをながめつつ、経済的な意味合いもあり、ジレンマを感じます。

限られた経費の中で無駄を省きながら、かつ、必要なものはたっぷりと整え、幼児の気持ちに即して、豊かな環境を整えてやりたいと思っているのです。

〈頭の痛い折り紙〉

折り紙(正方形の色のついた紙)をそれぞれの園、又はクラスで、どのように考え、管理しているかは、その園の保育を知るうえで、興味深いことです。

全く置いてもいないし、使うこともない園から、一日一人一枚まで、と使わせてはいるが、強力に管理している園、三〇枚位出しておいて、一日に使い切ったらおしまいの園、使いたい放題出してある園と実に様々です。

折り紙の消費量は園やクラスの保育の質や有り様

▲折り紙でたくさん作る

と深くかかわっているようにも思えます。同じ園の中でも、担任の教師によって、折り紙をたくさん使うクラスと、ほとんど使わないクラスがあります。

出身の短大や養成校にもよるのかもしれません。保育における折り紙依存度の高い所と低い所があるのです。

女児は、他に特にやりたいものが見つからないとき、とりあえず折り紙に手をだし、何枚でもあるだけ使ってしまうことがあります。

もし、砂場で幼児が、じっくり落ち着いて百個のおだんごを作って砂場の縁に並べて、「先生、ぼく百個作った」と満足そうに言ってきたら、教師はその遊びを温かく見守り、その集中力と根気をほめてやることができるのですが、これがもし、折り紙で奴さんを百個作って、机の上に並べて「先生、奴さん百個できた」と言って来た時、教師は温かく見守り、たくさん並んだ奴さんを心から喜んでやることができるでしょうか。もちろんその幼児の固有の問題や状況を抜きに判断はできませんが、一般には一人で百枚も使ったことに内心イライラを感じるのではないでしょうか。

砂場のおだんごは作り終えた後、踏み潰したり、砂場の中に返すことによって、元の状態に戻すことができるのですが、一度使った折り紙は線やしわがついてきたなくなってしまう消耗品なのです。

しかし、砂場の砂は消耗する自覚は無いのですが、年間四立方メートルで三五〇〇〇円位のコストはかかっているのです。一方、普通の十五×十五の折り紙は一枚二円で、一昨年では三二〇〇〇円位購入していますから、トータルとしては、砂場のほうがかかっているともいえるのです。しかし、目の前に見える、奴さんが二〇〇円に相当すると思うとき、教師はやはりたじろぎ、たくさんできた奴さんを素直に喜べない気持ちになるのかも知れません。

折り紙の問題は根深く保育の現場にくいこみ、まだまだ考えなければならない問題をたくさんかかえています。

〈セロハンテープの宝石〉

セロハンテープの出現は幼児の表現や構成の活動を大きく拓きました。それまで、接着はほとんどのりに限られ、素材が紙に限定されていたのです。折り紙や画用紙、のりで立体を作ろうとすれば、プリント教材や製作帳にたよらざるを得なかったという事情も汲み取れます。

さて、この紙はもとより牛乳パックでも、プラスチックでも金属でもねばりついてくれるセロハンテープこそ保育に無くてはならぬものとなっています。また、表面から張り付けるセロハンテープは、裏面にのりをつける作業よりはるかに幼児に分かりやすいのです。

こうして、幼児がセロハンテープを接着に使っているときは、多少要領悪く、たくさん使っていても見逃していられるのですが、新しい使い方をされると教師は急に止めて欲しい気持ちになります。

例えば四歳の女児が三人で、セロハンテープをぐ

りぐりに巻き取って、親指大の玉を作り油性のマーカーで色をつけ、宝石を作り「先生見て、キレイ」と、にぶく光る玉をそれぞれに幼児に見せられると、たいていの教師は「きれいね」と一緒に喜んでやる前に、「アレ！」という困った気持ちになるのではないでしょうか。

幼児がセロハンテープを丸めることはよく見られる遊びです。ちぎっては丸めてままごとのごちそうにしていた幼児や、丸めたセロハンテープの玉にたこ糸をつけて釣り堀ごっこをしていた男児など、幼児が自分で創りだす遊びにはまま見られます。大人にとっては、セロハンテープを丸めておだんごを作る等という、道ならぬ使い方をされるとイライラするし、正しくないという思いや無駄だという価値観から、いたずらとして止めさせたい行為、又は禁じたいものとなります。けれども、セロハンテープで接着以外の使い方があってはいけないのでしょうか。大人が期待する使い方とは少し違っていますが、幼児は創造的にセロハンテープの特徴を生かして、遊びを見つけだしたともいえるのです。

幼児は日々出合う新しい素材や道具を彼らなりのやり方で「あなたはいったいなんですか」と確かめたり、吟味しているのです。もちろん正しい使い方の指導も大切ですが、正しい使い方の名の下に幼児の初々しい発想やイメージ、意欲、面白さ等を根だやしにしてはいないでしょうか。セロハンテープの一巻や二巻をだんごにしたところでたいした問題とも思えないのです。ひと通り経験すれば納得して卒業するのですから。

担任の教師とセロハンテープの玉について話をしてみると、奨励はしないけれど、容認しているとのこと。園長や担任の考え方、許容性によって幼児の持つ経験はかなり違ってきます。ためしたり、失敗したり、無駄をくぐりぬけて育つことも多いのです。

〈コンピュータ用紙〉

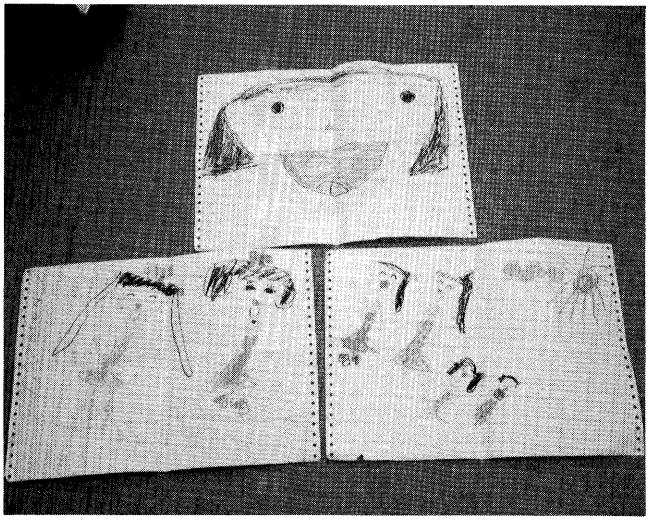
幼児に用いられる消耗教材で紙は主食のようなものです。画用紙、カラー画用紙、模造紙、上質紙など様々な種類の紙が用いられます。

絵は絵を描いたり、鋏で切り抜いたり、のりやセロハンテープでくっつけたり、パンチで穴をあけたり、ホチキスで束ねたり、幼児の力で扱える、イメージを具体化できる素材です。けれども、紙は砂、粘土、積み木のように同じものを繰り返し何度も使うことの難しい、一回きりの消耗品です。絵を描いたり、お面を作ってかぶって遊ぶのには、画用紙も上質紙も抵抗はないのですが、飛行機を折って飛ばしたり、紙鉄砲を作ってならしたり、剣を巻いて戦いごっこをするのに、上等な紙は抵抗があります。

新聞紙や広告の紙なども使いましたが、ここ一〇年程は国の研究機関から廃棄処分のコンピュータ用紙を無料でもらってきています。B4版の大きさで、一箱に二千枚入っています。白く張りのある紙が自由に使えることは大変便利なことです。

さて、便利なコンピュータ用紙を幼児はどのよう

▼コンピュータ用紙を使って



に使っているでしょうか。

1　絵を描く

描きたいという気持ちのある幼児が、紙のあるテーブルにきて、マーカーやクレヨン、鉛筆など好きなものを選んで好きなだけ描いていきます。描いたものは教師が受け取り、名前と日付けを書くようにしています。迷路やマンガのキャラクターを何枚も描くこともありますが、全く制限されることなくイメージを思うままに表現します。一回に三枚も五枚も、もういいというまで描く幼児もいます。丁度先生におしゃべりをして、気持ちが充たされるように、たくさん描いて教師に見て貰えるのは、表現したい気持ちを充たすものとして、幼児にふさわしいものと思います。紙が自由に使えるのは気が楽なものです。

2　折る

B4サイズのコンピュータ用紙は、大きさも紙の質も飛行機や紙鉄砲を折るのに最適です。さまざまな折り方を工夫して飛ばしたり、ならしたりします。その他、蛇腹折にして半分に折り、扇子を作ってジュリアナごっこがはやったこともありました。

封筒作りをした年長の女児のグループも印象深いことでした。五月の下旬に五人の女児がお手紙遊びをしていたので、教師がコンピュータの紙で、封筒を一枚作ったことから、封筒作りが始まりました。紙をたたんで、のりづけし、底をはりつけるだけなのですが、初めはのりづけがうまくできなかったり、底の紙を一枚切り落とすことがわからなかったりと散々苦労していたのですが、出来上がるとそれなりに成就感や満足感のある遊びになり、三日間程メンバーが入れ替わりたち替わりして、封筒作りを楽しんでいました。

3　巻く

何時の頃から、幼児はこんなにも紙を巻いては剣をつくるようになったのでしょうか。どの園に行っても紙の剣を振り回す男の子を見かけます。

以前はブロックで剣を作ったものですが、近頃は紙を巻いたものをよく見かけます。紙質は上質紙や広告紙、コンピュータ用紙のような張りのある薄手の紙が適しています。四歳児の五月六月頃、「先生、剣作って」と何人もの男児が紙を持って教師の所に頼みにきます。一本巻いてテープで止めて渡すと、「もっと」と言って、次々に二、三本ねだります。作ってもらうと喜んで走り去りますが、様子を見ると、しばらくすると、ロッカーに入っていたり、廊下に投げてあったりして有意義に使った様子も見えません。

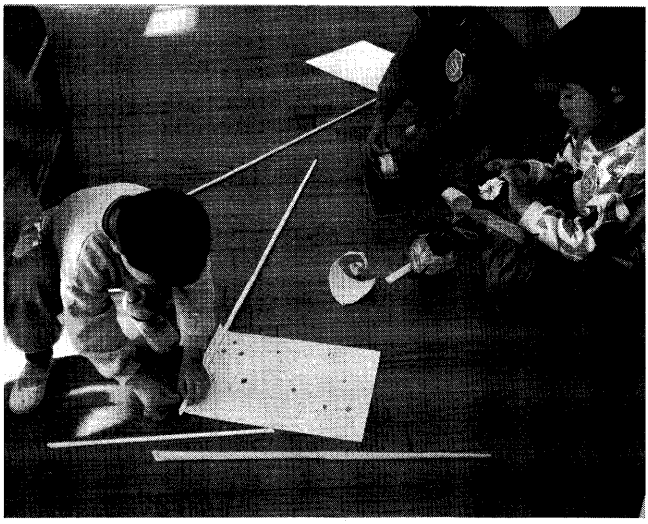
剣作りの意味を考えると次のようなことがわかります。

① 教師と幼児の心のつながりを求めていること

あるとき、次のような例がありました。

毎日、毎日朝から「剣作って」と来るので、前日余裕のある時に二〇本程の剣を作って置いておき、翌日、健一が「剣作って」と来た時にすかさず「はい」と渡したところ、彼は憤然と「だめだよ、これじゃ、ぼくの為に作ってよ」と自分で持ってきたコンピュータ用紙を差し出すのです。ただ剣がほしい

▼細く丈夫な剣作り



わけではなく、先生が目の前で、僕のために時間と労力をかけて作った剣が必要だったのです。この待ち時間が幼児の剣の大切な部分であることが分かりました。しかし出来上がって手にした時はうれしいけれども、剣そのものはもういらないとも考えられます。

② 友だちとのつながりを求め

四歳の男児にとって、テレビのアニメーションのカクレンジャーごっこに仲間入りするのに、ビニールの忍者服と剣は必需品なのです。折れたり曲がったりした物は使い物にならず、毎日毎日新しい剣を作ってもらうのです。

③ 紙巻の技術の上達

毎日教師に頼んで作ってもらうのがじれったくなると、なんとか自分で作るようになるのですが、初めのうちは手先が無器用で、なかなかできません。粘り強い練習の結果上達し、より細く、より堅くできるようになり、教師の巻いたものと遜色のないでき栄えになります。友達に教えたり、作ってやります。剣の持ち手を工夫したり、鞘を作ったり、カラービニールで巻いたり、長く二メートル位につなげて天井につけたり、それなりの工夫や変化は見られますが、所詮、紙を巻いて剣にして振り回すだけの単純な遊びは、もっと面白いグループでの遊びや、サッカー、ドッジボールなどに移行し、年長になるとほとんど作らなくなります。

幼児の遊びはもともと何かの役に立つことを当てにしているわけではありません。砂場の穴掘りも、粘土のおだんごも、面白くて、やりたくてやっている事にこそ意味があるとするならば、この剣作りも、折り紙の遊びも、セロハンテープの宝石も、大人には「無駄」に見える教材を消耗しながら、育っていく何かがあるように思います。

（つくば市立桜幼稚園）